

内船場蔵南石垣と豎堀跡

1 姫路城内船場蔵南石垣の概要

今回、発掘調査と石垣修理を行っているのは、姫路城内曲輪の東部、天守からみて南東側になります。姫路城を取り囲む内堀の一部は、動物園の西側で北西へ分岐し、三の丸広場と搦手の間を分断していました。この堀に面した石垣が内船場蔵南石垣です。江戸時代は、この堀のため、三の丸広場側と喜斎門内の搦手は分断されており、現在の通路は昭和8(1933)年に敷設されたものです。

絵図によると、江戸時代には内船場蔵南石垣上に土塀があり、その土塀は姫山の斜面を上山里丸下の石垣際まで延びていたようです。

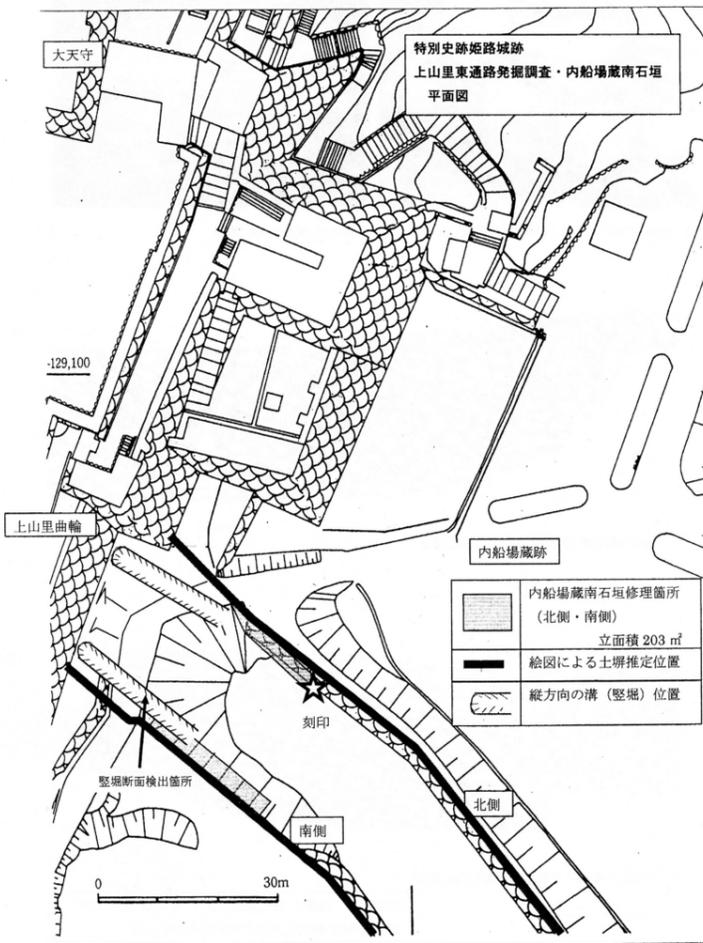
姫路城の石垣は、築かれた時代別にⅠ～Ⅴ期に分類されます。16世紀末頃に羽柴秀吉が築いたのがⅠ期で、自然石を積上げた野面積み。関ヶ原合戦後に播磨に入封した池田輝政により1601年頃から築かれたのがⅡ期で、矢と呼ばれる楔で割った石を積んだ打込みハギです。この石垣は凝灰岩(ぎょかいがん)を使用した打込みハギで、Ⅱ期と推定されています(「城踏」No.64)。

2 発掘調査と保存修理工事の概要

平成28年度、姫路市埋蔵文化財センターが姫路城跡上山里東通路の発掘調査を行い、その成果を踏まえて城郭研究室がそれに隣接する内船場蔵南石垣保存修理を行っています。

姫路市では平成2(1990)年度から、継続的に石垣修理を行っています(平成10～14と19年度は未実施)。今回の内船場蔵南石垣ではオリジナルの石垣を解体せずに、脱落していた間詰石を補充するとともに、石材に生じたひび割れに樹脂を注入することにより、割れの拡大を防ぐ工事を行っています。

- ・発掘調査期間 平成28年6月30日～11月6日
- ・石垣修理工事期間 平成28年12月8日～平成29年3月17日(予定)

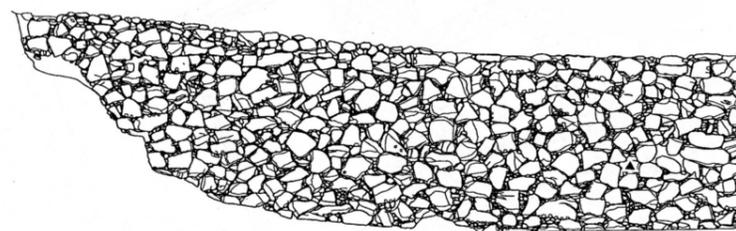


- ・修理対象石垣面積 203㎡(立面積)
- 北側102㎡(高さ約2～6m×長さ約20m)
- 南側101㎡(高さ約1～6m×長さ約16m)

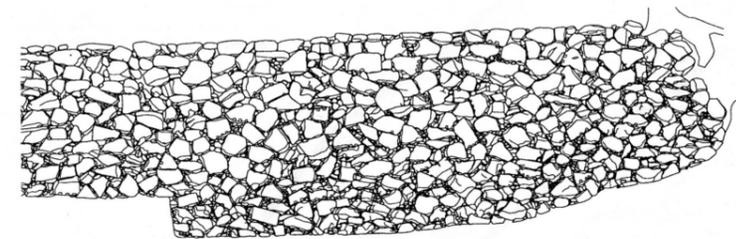
3 発掘調査でわかったこと

- ・玉石(河原石)を主に使用した江戸時代の石垣間詰の様子が確認できました。それにもとづき、修理では玉石を主に使用して、抜け落ちていた間詰石の修理を行います。
- ・堀の突き当たりの斜面は、江戸時代には現状よりも急傾斜であったことがわかりました。一部では姫山の岩盤が剥き出しになっていた箇所があったと思われます。
- ・上山里曲輪東通路よりも上の上山里曲輪東側との間の斜面には縦方向の溝状のへこみがありますが、発掘調査でその続きの断面が確認できました。一部で姫山の岩盤を削っており、人工的に掘られたと考えられます。この溝は、絵図から想定されている斜面の土塀に沿った位置にあり、これは、大手側と搦手側の城を攻める敵兵が連絡することを防ぐ城内区画の機能が想定されます(写真)。

平山城などで斜面に設けられた縦方向の溝は、石垣とセットになったものが文禄・慶長の役で朝鮮半島南部に加藤



内船場蔵南石垣の堀の北側石垣立面図 ▲刻印



内船場蔵南石垣の堀の北側石垣立面図



豎堀状の溝(黄線の間) 2本見える



発掘調査で確認された豎堀状溝の断面 幅約3.2m、深さ約1.5mで一部で姫山の岩盤を削り込む。埋土には棧瓦が含まれており、昭和の通路開通時に埋められたとみられます。

清正などの武将によって築かれた倭城で発達し、彦根城(滋賀県)など関ヶ原合戦後に築かれた城にも引継がれます。姫路城でも、そのような軍事的な先進の縄張技術を取り入れていたと考えられます。

4 石垣修理でわかったこと

石材調査では、新しく刻印が確認されました。刻印は○の中央を横棒が通るもので、この種類はこれまで知られていませんでした。この石垣の築造か石材確保の担当者を示す可能性があります。